

益田市埋蔵文化財調査報告書

鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報

1984. 3

島根県益田市教育委員会

序

益田市は、万葉の歌人柿本人麻呂や雪舟ゆかりの地としていい伝えられております。古代の遺跡についても、安富王子台遺跡、スクモ塚古墳などをはじめとして数多くの遺跡があります。

このたび益田市において、昭和58年度国庫補助事業として、鶴ノ鼻古墳群発掘調査を行いました。鶴ノ鼻古墳群は、国鉄津田駅の西約1kmの日本海に突き出た高さ約20mの半島の台地の上にあり、かつては前方後円墳を含む円墳が50数基もありましたが、明治、大正時代の国道、鉄道工事等で壊されました。現在では県指定文化財を受けている19基がはっきりと確認されているだけで、遺跡全体の調査はこれまで行われたことがなく、今回発掘調査を実施いたしました。

本書は、この調査の概要であります。広く各方面にご活用いただければ幸いです。

なお、この調査にあたってご指導ご協力いただきました、島根県教育委員会、島根大学、安田公民館、地元関係者各位に対して深く感謝申し上げる次第であります。

昭和59年3月

益田市教育委員会

教育長 河重貞利

例　　言

1. 本書は昭和58年度に、益田市教育委員会が国庫補助事業として実施した鶴ノ鼻古墳群発掘調査の概要である。

2. 調査にあたっては、島根大学考古学研究室及び島根県教育委員会の指導と協力を得て次のような調査組織で実施した。（敬称略）

調査主体　益田市教育委員会教育長　河重貞利

事務局　社会教育課長　服部悦郎　課長補佐　森脇栄一　主事　椋　行雄

調査員　益田市教育委員会社会教育課　木原　光

調査指導　島根大学法文学部教授　田中義昭　島根県教育委員会文化課　文化財保護主事　勝部　昭　同主事　西尾克己

調査協力　房宗寿雄・長沢康弘・角田徳幸・伊藤克己（以上島根大学学生）

作業員　岩崎善嗣　佐々木健一　渋谷源一　高橋好市　岩崎とみ子　大石美恵子　渋谷三枝子　城市マツヲ　高橋房子

3. 遺物整理及び報告書作成の過程では、岩本君江、広瀬美美子の両氏にご協力いただいた。また角田徳幸氏、伊田喜浩氏（島根大学学生）からも協力を得た。記して感謝する。
4. 本書の編集・執筆は勝部昭、西尾克己の協力を得て木原が行なった。
5. 挿図に付した方位はすべて調査時の磁北を示している。

目　　次

I	古墳群の位置と周辺の遺跡	1
II	調査に至る経緯	4
III	鶴ノ鼻古墳群の概要	5
IV	発掘調査の概要	8
V	ま　　と　　め	20

I 古墳群の位置と周辺の遺跡

島根県の西端に位置する益田市は石見地方西部の中心都市である。中世、石西に霸を唱えた益田氏の城下町として発展し、以後商業を基盤にしながら現在に至っている。また、山口と結ぶ国道9号線と広島県の加計に通ずる191号線が交わり、山陰本線が海岸沿いに、山口線が分岐して山陽本線に接続するなど山陰中央部と山陽地方や北九州地方を結ぶ交通の要衝でもある。

市域は三方を低丘陵性の山々に囲まれ、北は日本海に面している。中国山地に源を発する高津川と益田川の2大河川が北流して日本海に注いでおり、その流れによって形成された肥沃な沖積平野を中心に市街が広がる。海岸は14~15kmにわたって砂浜で小規模な砂丘や潟湖も存在している。

益田市は平野に乏しい石見部にあっては、広大な平野を有し、気候も温暖で、古くより人々の営みが成立し得るような恵まれた自然条件が備わっていたと考えられ、またそれを裏付けるかのように数多くの遺跡が存在する。

その代表的なもののひとつである鶴ノ鼻古墳群は、日本海に突出した標高20mあまりの丘陵上に位置し、益田市街からは直線にして北東へ約5km、国鉄石見津田駅からは西へ約0.5kmのところにある。丘陵の西に遠田港を抱き、南側は山陰本線によって分断され、そのすぐ上を市道中ノ島津田線が走る。国道9号線を獄川沿いに北へそれ、踏切りを渡って海岸沿いの道路を西へ行くか、遠田港からの遊歩道を登れば、古墳群の存在する丘陵上に至ることができる。

(文献2、12)

さて、鶴ノ鼻古墳群の周辺には現在のところ次のような遺跡が知られている。

津田川沿いでは、3基の円墳から成る峰山古墳、土師器や須恵器が出土した水雲島遺跡、広範囲にわたって須恵器の散布が認められる日ヶ迫遺跡などがある。また、津田の西にあたる丘陵上の共同墓地に2基の古墳が存在している。大道古墳と呼ばれ、内部主体はともに箱式石棺と考えられている。



一方、当古墳群の西方、両岸に水田の広がる遠田川沿いにも数多くの遺跡が知られている。遠田川の右岸、中遠田の標高50mあまりの丘陵上に位置する大元古墳群は1基の前方後円墳と6基の円墳からなるが、中でも1号墳は全長90mに及ぶ県下でも最大級の前方後円墳で、後円部に比べて前方部がやや長い特徴をもつ。他に中遠田から上遠田にかけての丘陵上には、木原古墳、石仏古墳、杜山古墳などが点在している。

遠田ではこれらの古墳の他、土器の散布する遺跡がいくつか知られている。二反田遺跡神明遺跡、三百田遺跡、二葉遺跡、スケ入道遺跡などである。二反田遺跡からは最近多数の須恵器片が出土したが、これらの遺跡の実態は今のところ判断としない。この地域の地勢と古墳の在り方をふまえれば、墓地に対しての集落という想定もでき、以上の遺跡はその一端をかいま見せているのかも知れない。

須恵器窯跡では西平原の芝・中塚窯跡がいち早く調査がなされ良く知られているが、近年遠田の本片子遺跡でも窯跡が検出され、須恵器の他に瓦の生産も行なわれていたことが（文献16）明らかになった。かつてこの付近から染ヶ迫窯跡、杉迫窯跡が発見されたこともあり、一帯にいまだ未発見の窯跡が存在する可能性が強い。

広く益田市域を概観すれば、近くから三角縁神獣鏡が発見されている四ツ塚古墳（円墳2基、直径20m）、スクモ塚古墳（前方後円墳？全長100m？）、小丸山古墳（前方後円墳、全長50m）などが代表的なものであろう。他に横穴式石室を持つ秋葉山古墳、白上古墳、益出で唯一の方墳と考えられている叶屋上山古墳などがある。また、益田平野に突き出した舌状の丘陵斜面には以前から群集する横穴が注意されており、北長迫横穴群や片山横穴群はその典型と言える。しかし現在では、前者は丘陵の北端に数基を残すのみで、後者に至ってはそのほとんどが姿を消そうとしている。

（文献5



- 1 鶴ノ巣古墳群 2 岩山古墳 3 水雲島遺跡 4 日ヶ追遺跡 5 大道古墳 6 杉追窓跡 7 茅ヶ追窓跡 8 本片子窓跡
 9 木原古墳 10 神明道路 11 大元古墳群 12 石仏古墳 13 二反田道路 14 村山古墳 15 三百田道路 16 二葉道路
 17 スケ入道道路 18 スクモ塚古墳 19 四ツ塚古墳 20 小丸山古墳 21 吐羅上古墳 22 片山横穴群 23 秋葉山古墳 24 北長道古墳

図1 古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

II 調査に至る経過

鶴ノ鼻古墳群は益田市達田町 3363 番地、3366 番地他に所在し、その遺跡番号は 1687 である。現状は山林ないし荒地で、一部畠として利用されている。

この丘陵上に多くの古墳が存在することは古くから良く知られている。地元の人々はこれらの古墳を特に「塚穴」と呼び慣わしており、丘陵の一部には塚穴原という字名もある。この古墳群が具体的な記述を持って文献に現れてくるのは、文化・文政の頃に石田春律によって著された『石見八重篠』で、「津田達田の辺塚穴十六七存し、昔五十余りあり。」という一文が見える。その後の研究者によても 50 基あまりという当古墳群の総数はほとんどそのままで認識されてきている。

(文献 2)

矢富熊一郎氏の『安田村發展史』上巻によると、古墳の一部は幕末の頃から近隣の人々によって除々に発掘されたようだが、明治 22 年の国道工事や大正 13 年の山陰線敷設工事を契機に本格的に破壊の憂き日をみたものが多く、耕地整理のために石材が搬出されてしまった古墳もかなりの数に上るらしい。

今のところ現存するのは約 30 基で、谷を狭んで対峙する西側の二つの丘陵に比較的良く保存されていた 19 基が昭和 33 年に県指定史跡となっている。その他の古墳は畠地内あるいは荒地中に点々と認められるが、後世の削平によってほとんどが原形を失ってしまっている。

副葬品についてはこれまでに、各種須恵器、耳環・玉などの装身具類、大刀や鉄鎌の武器類の他滑石製紡錘車などが出土しており、なかに優秀な単龍環式の柄頭もみられるが、そのほとんどが出土古墳の判明しないものである。

このような状況の中、近い将来に予想される開発にそなえて、遺跡保護に必要な資料を得るために発掘調査を実施することになった。調査は県指定地以外の丘陵全体を対象とし、トレーナによる発掘調査を行なった。調査の前半は南側と北側のゆるやかな丘陵上で古墳基底部の検出に努め、後半は県指定地外に残る古墳の規模及び残存の程度を確認することを目的とした。

調査期間は昭和 58 年 12 月初旬から昭和 59 年 2 月中旬に至る約 3 ヶ月間で、調査における総事業費は 300 万円である。

III 鶴ノ鼻古墳群の概要

鶴ノ鼻古墳群は石見地方の代表的な群集墳のひとつで、面積約5万m²の広い丘陵上にかつては50数基の古墳が築かれていたと言う。この丘陵全体は大まかに、その中央部から北と南に分かれてそれぞれ西へ伸びてゆく2つの小丘陵と北向きの陥地を狭んで弧状に広がる東側の平坦な丘陵部分から成る。現在、古墳は北側の丘陵の西に最も高い密度で分布しており、南側の丘陵先端に前方後円墳1基、他は海を見おろす北の縁辺部に近い位置で東へと点在している。なお山陰本線の南側にも少なくとも1基の古墳が残っている。

この古墳群については、これまでに郷土史家矢富熊一郎氏の研究成果があり、残された著述も多い。特に『安田村發展史』上巻や『鶴ノ鼻古墳群』では個々の古墳について詳細な説明がなされている。後者によれば、鶴ノ鼻古墳群の内容は、前方後円墳2基、円墳49基、竪穴式石室（箱式石棺）1基、それに方基円墳1基を加えた計53基である。このうち前方後円墳については『益田市誌』上巻において、それまで円墳と誤認されていた1基が追加されて計3基と修正されている。内容に若干の混乱が見受けられるが、これらの文献が古墳群全体を把握する上で重要な手がかりとなることは疑いない。

以下、古墳群の概要について見ていくことにする。

前方後円墳は今のところ3基確認されている。17号前方後円墳は全長約30mで、北側丘陵の松林中にあり、県指定境界線に接するように位置している。当初は円墳と考えられていたものである。石室は南西へ開口しており、今回実測図を作成することができた。それによれば、石室は全長5.2m、幅2.0m、高さ1.9mで、羨道部は現存するところで長さ約2.5mを測る左片袖式のプランをもつ。43号墳は南側の丘陵端に1基のみで存在する全長30mの前方後円墳である。また、丘陵の中央部やや北寄りの畠中に、周囲を石垣で囲まれた比高約1mの一見して古墳の残骸であることが認められる平坦な高まりがある。かつての32号前方後円墳で、文献に三段階にわたる変形の様子が略図で載せられており、それが現状と一致するのではば間違いないと思われる。もとは全長27mであったらしい。これら3基の前方後円墳は、それとしては比較的小規模なものであろう。

古墳群のほぼ全体を占める円墳は、そのほとんどが直径10m前後、高さ2~3mのものである。現在5基の円墳が開口しているが、石室は花崗岩質の転石と割石を利用し、側壁を持ち送り式に積み上げる共通の手法をとっている。1号墳、15号墳は左片袖式、8号墳は右片袖式の石室プランを持つ。9号墳、16号墳は開口しているものの羨道部に土砂が流

れ込んでいるので袖の状態は明らかでない。

この他、箱式石棺を内部主体とするもの 1 基、方基円墳と呼ばれる特異な墳形を持つ古墳 1 基が存在していたようだが、現在では確認することが困難である。中でも方基円墳については『島根縣史』第三巻に詳しい。それによれば、高さ 0.6m、短辺 13m、長辺はそれ以上の長方形を呈す方基部の上に直径約 9m の円墳状の封土を持ち、内部主体は両袖式の横穴式石室で、奥へいくほど側壁のすぼまるハート形の石室プランを有していたと言われ、古墳としてはきわめて異例のものである。

古墳時代後期に横穴が盛行する益田において、このように鶴ノ鼻古墳群は多くの小円墳と小規模ながらも数基の前方後円墳で構成されるというやや異なった内容を示すものとして注目されよう。

註 文献 8 に掲載されている古墳分布見取図によれば、10 号墳が前方後円墳と示唆されているが現状でその墳形を確認することは不可能である。

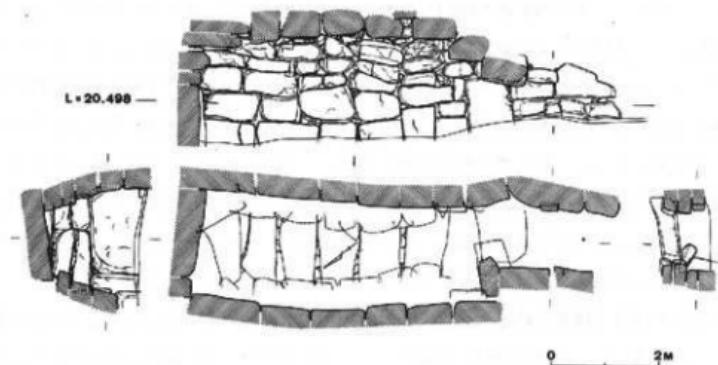
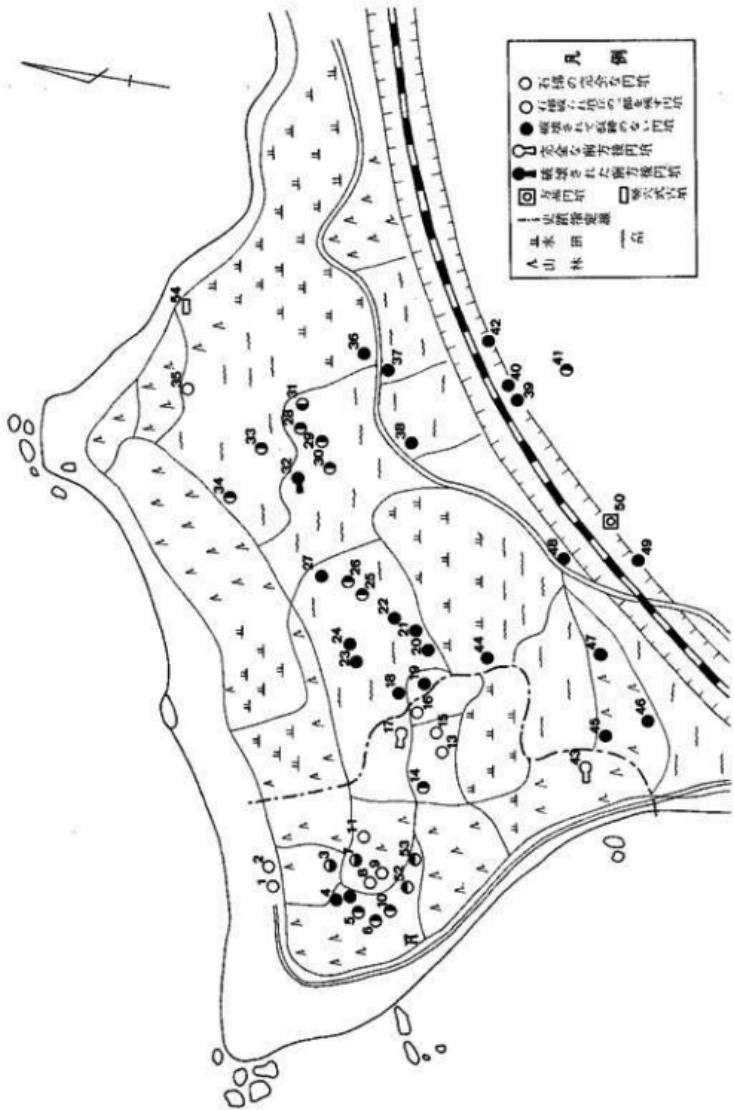


図 2 17号前方後円墳 横穴式石室実測図

図3 須ノ鼻古墳群分布図 (文献3より加筆転載)



IV 発掘調査の概要

調査にあたっては、磁北線を基準にし、それと直交する東西線で $20m \times 20m$ の方眼を調査対象地区全体に組み、これを基準にトレントを設定した。また、丘陵全体を便宜的にF AからFの6地区に分けたが、それぞれの地区に存在する古墳については過去に古墳群全体にわたって付されている番号で混乱をきたさないよう、このアルファベットと数字で示すことにした。

以下、各地区における調査の概要を述べる。

1. A地区

南西のゆるやかな丘陵部分で標高は約 $20m$ である。丘陵は西へ伸びるが、その先端の松林中に43号前方後円墳が築かれている。現状は荒地であった。

幅 $2m$ のトレントを丘陵の尾根に沿わせて設定し調査を進めたが、新たに古墳を確認することはできなかった。かつての畠の堀を示すような不明瞭な溝状のものが東西と南北の二方向で認められたが、性格は不明である。東側のトレントで焼土部分が1ヶ所見つかっている。遺物は含まれていなかった。なお、設定したトレントの西端、県指定境界線に近い所で、地山面から約 $45cm$ 落ち込むかなり幅の広い溝状遺構の一部を検出しているが、これはさらに西へ続いているようで、43号前方後円墳をめぐる周濠の一部と思われる。

2. B地区

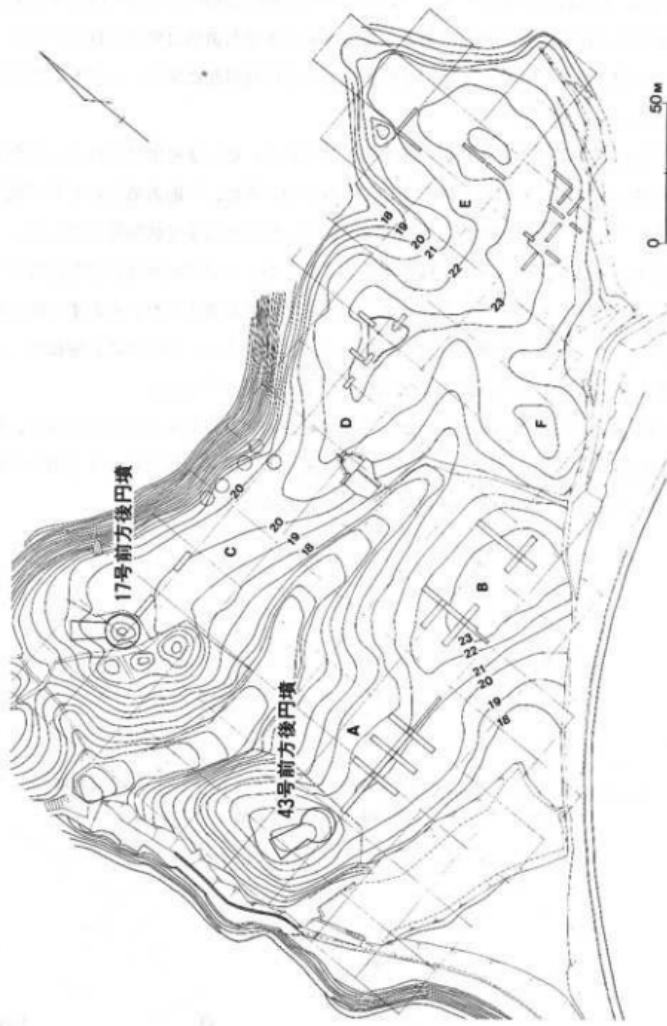
A地区の東、標高 $20\sim 23m$ の平坦な丘陵上である。西は荒地で、東は畠として利用されていた。

トレントは東西2ヶ所に幅 $2m$ のものを設けた。ここではピット群を検出したのみで、他の遺構は発見できなかった。ピットは40個あまりで、直径 $20cm$ 内外、深さ約 $5cm$ の不整形のものがほとんどである。これらはある程度の規則性をもって並んでいるかのようだが、今のところ詳細は不明である。A地区と同様、この調査地区でも遺物は皆無であった。

3. C地区

A地区と谷を狭んで北側の、東西に長い丘陵部分である。その西には県指定の古墳群が

図4 調査区配置図



接し、北は眼下に海が広がる。現状は荒地である。

幅2m、長さ10mのトレンチを東西に2本設定して調査を行なった。西のトレンチは17号前方後円墳の裾部にまで及んだが、その周濠やその他の遺構についても検出されず、わずかな須恵器片の出土をみたのみである。東のトレンチでも遺構は発見されていない。

さて、この調査区で得られた成果は伐採後北側の丘陵縁辺部に5基の古墳群を確認できることである。

C-1号墳は低い墳丘に天井石の一部が露出している。C-2号墳はそれらしき高まりは認められないものの海側の斜面に若干ふくらみが認められ、一応古墳としての可能性を考えておきたい。C-3号墳は明らかに古墳であり、墳頂部はすでに陥没してしまっている。さらにその東は海に向かって土砂が崩壊しているが、その崖面には石室を構成していたかのように栗石が並んでいるのが見える。これをC-4号墳とした。そのすぐ南にC-5号墳が存在する。原形は大きく損なわれているが、約0.7mの高まりに石室に用いられていたと思われる大きな石と人頭大の栗石がいくつか見受けられる。

これらの古墳は未調査であるが、ほとんど接するかのように並んで築かれており、他の古墳と比べればいくらか小さいという印象を与えるものである。なおC-1号墳の南にこれらの古墳から抜き取られたと思われる石が積み重ねられている。

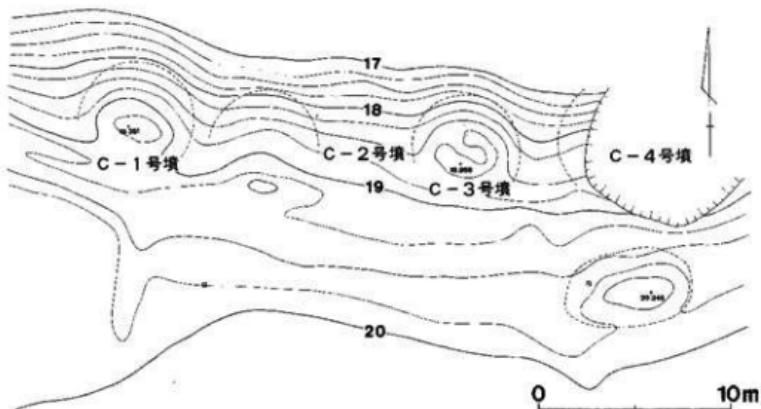


図5 C地区古墳群地形測量図

4. D地区

この調査地区には2基の古墳が存在している。うち1基は調査前にも容易にそれと識別できるほど比較的良く原形をとどめていた。西に位置する古墳をD-1号墳、東のそれをD-2号墳とした。2つの古墳の間は麥畠となっており、他は荒地ないし山林である。

D-1号墳は丘陵の尾根からやや南側の斜面にかけて築かれており、すぐ前から谷が始まり西へおりてゆく。墳丘の上半分は削平され、南側で比高約2.0mの楕円形の平坦面をなしていた。以前、その上は畠として利用されていたらしい。この古墳の西から北にかけての部分はほとんど原形を保ちながら現在に至っているようだが、東から南の部分は耕作のため鋭く削り取られている。

北と東の小さなトレーナーで古墳の裾部を、南西の調査区では周濠を検出することができた。周濠は約1.5mにわたって古墳の周囲をめぐっており、深さは約10cmである。D-1号墳は周濠から復元すれば、もとは直径15m前後の円墳であったと考えられる。

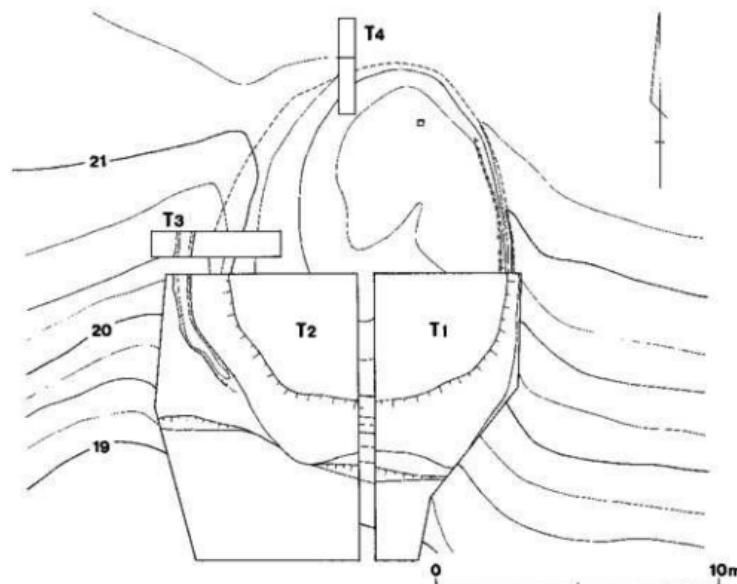


図6 D-1号墳調査区配置図

また、南側の表土をかなり広めに剥いだところ、すでに削られてしまった部分の断面に古墳の築造過程をあらわすかのように何層かの土層の違いが認められた。そのほぼ中位に黒色土が狭まれているが、ここから須恵器片が出土している。石室の遺構面と思われるこの黒色土層は南側でややレベルが下がっており、これがかつて石室の向きと合致するのかも知れない。文献によれば、国道工事の際に石材が取り去られているようだが、次のD-2号墳と同じように石室の一部が残っている可能性がある。

D-1号墳から北東へ約30mのところ、周囲を石垣で囲まれて、その上に広い平坦面を持つ高まりがある。これをD-2号墳とした。北は荒地で、東は松林であった。

(文献3)

この古墳については、文献にその変貌の様子が図とともに詳しくふれられている。元来

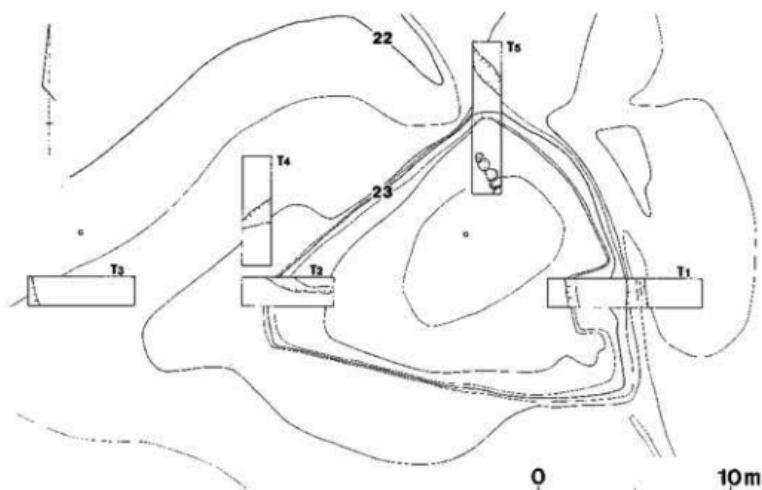


図7 D-2号墳調査区配置図

は全長27mの前方後円墳で、後円部と前方部の高さはそれぞれ5.0m、1.8mを測ったらしい。発掘はされていたものの大正時代までは石室も完存し、当古墳群中最も整美なものだったと言う。しかし、山陰線敷設工事の際に破壊を受け、石材はすべて搬出されてしまったとある。以後徐々に原形を失うこととなり、後円部の封土がかきならされて2段の畝に、さらに全体にわたって均一にならされて現在に至っている。

この古墳は、周囲で表採された須恵器もかなりあり、文献の内容からも前方後円墳には（文献3）ほぼ間違いないと考えられたが、トレンチによってその墳形を確認することを第一の目的として調査を進めた。高まりの北、東、西に幅1.5mのトレンチを設定し、文献からかつての主軸方向を推定して、前方部を検出するためにさらに西の部分で方向の異なる2本のトレンチを設けた。

その結果、墳形を確かめるには至らなかったが、北側の第5トレンチで石室の一部を検出することができた。石材は側面をそろえてさらに高まりの中央部に向って伸びていくようで、側壁の下半にあたる部分が確認されたと考えている。もしこれが妥当なら、石室の主軸は南からやや東に振れていることになり、文献に見えるかつての開口方向の南西とは若干異なる。いずれにしても、石室の全てが破壊を受けているとされてきた古墳にも、少なくともその一部はいまだ地中に残っているもとを証明できたのは大きな成果であった。

また西側の第2トレンチでは、地山の高さがかなり違ってくる部分がある。あるいは前方部に関係してくるのかも知れないが、今のところは推測にとどめておく。

遺物は、高まりにかかる北側と西側のトレンチでかなり出土している。第5トレンチの石室内からは、提瓶、高坏をはじめ杯や壺の口縁部などがある。提瓶（図11-20）は高坏とともに床面に近い位置で発見されており、唯一の完形品でもある。高坏は小型のもの（図11-14）とやや大型（図11-15）の2タイプがある。図11-18は直口壺の口縁部、図11-9は長頸壺の肩から胴にかけての部分と思われる。

一方、西側トレンチでは地山直上の層位から、坏、高坏、直口壺などが出土した。坏（図11-2）は口縁部破片だが整形はシャープで、立ち上がりが長く伸びる。高坏には、やや大型で強いナデによって稜をきわだたせているもの（図11-16）と、図11-7のように短く聞く脚部に深く内彎する坏部の付つ形態的に異なる二種類があった。図11-6は壺の口縁部で、かなり開きの大きい図11-13もおそらく壺か壺の口縁部であろう。他に直口壺（図11-5）や小型高坏の脚部（図11-10、12）がある。

5. E地区

鶴ノ鼻丘陵の東端部にあたり、平坦な丘陵が北へ広がる。北東の岬には以前、魚群を見するための見張所があったと聞く。西は海へ向かうゆるやかな崖地によってD地区と隔てられるが、南東側は急傾斜で削られており、その下に何戸かの住宅が建っている。ここは一部畠として利用されている他はほとんど荒地であった。

E地区の南側には3基の古墳がほぼ一直線上に並ぶ。

E-1号墳は封土が著しく失われて周囲に石材が露出し、天井石と思われる大きな石が墳頂部に立てられている。現状で比高1.2mを測る。

E-2号墳は地表に5個の石材が置かれているのみで、それらしき高まりは認められない。

E-3号墳は丘陵の下から崖に作られた道を登りつめた所にある。塚のすぐ脇に存在する高さ1mあまりの土塊で、調査前には一応古墳と考えておいた。

調査はこれらの古墳の周囲に幅1.0mのトレーナーを計9本設定して行なった。その結果E-1号墳で周濠を、E-1号墳で周濠ないし地山の立ち上りをそれぞれ確認することができた。E-1号墳の北と西で検出された周濠は幅約80cmで、深さは10~15cmとやや浅い。

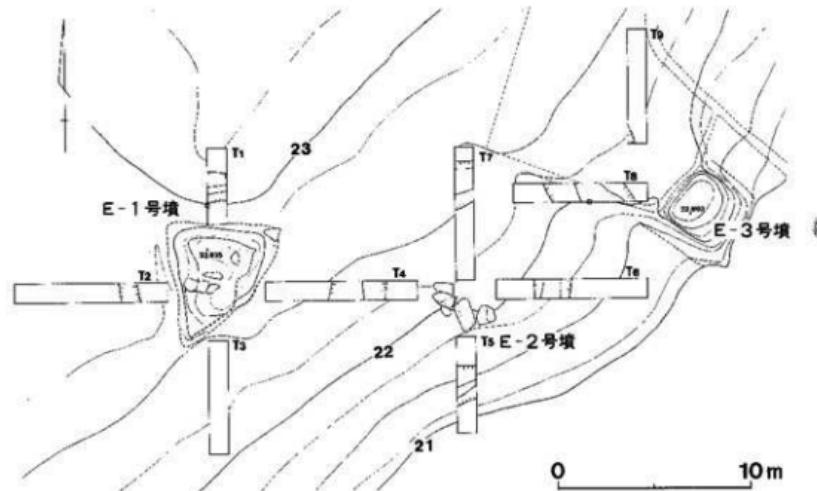


図8 E-1, 2, 3号墳調査区配置図

南側では周濠は発見できなかった。東のトレンチには深い窪みがあり、2号墳に近づくにつれて地山面は上っていく。墳形は確認されなかったが、円墳と考えれば直径10m前後のものであったと推定できる。一方、E-2号墳ではトレンチを発掘するに従い、四周で周濠らしき遺構と地山の立ち上がりが認められた。古墳の基底部と考えられ、直径12mの円形を呈する。東側のトレンチでわずかの須恵器が出土している。E-3号墳については2本のトレンチを設定したが、今のところ古墳が否かは明らかにされていない。

E-4号墳は以上の古墳と畑を狭んで北に位置する。最高部は地表からの比高2.5mで、西側が大きくえぐり取られたようにくぼんでいる。この古墳も周囲が削られており、封土もすでに弱くなっているため高い部分から崩れ落ちている部分が多い。

トレンチは現存する古墳からやや西寄りの所で南北方向に設定した。その結果、南側のトレンチで周濠を、北側のそれで不明瞭ながらも墳丘の裾を検出することができた。周濠はE-1号墳のものと比較すればかなりしっかりとしたもので、地山面から約45cmの深さに二段に落ち込む。ただし、その幅については確認できていない。また北側トレンチの南端では地山面上に小礫の集中する部分が見つかっている。礫中に須恵器片が混入し、先述した墳丘のえぐれがかつての石室の方向を示すとすれば、その主軸線上に重なっており、礫床

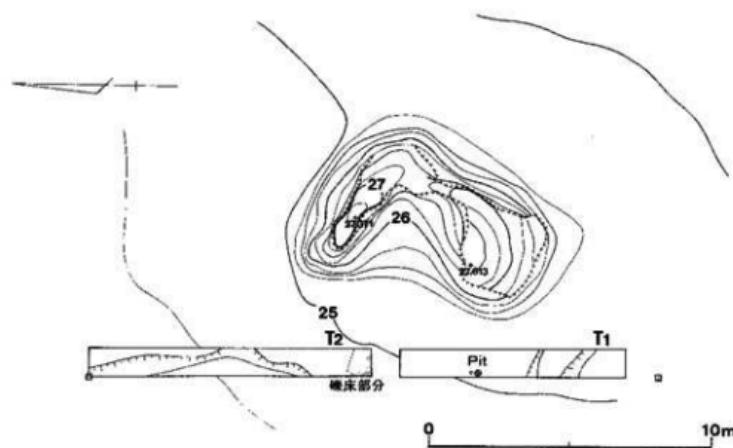


図9 E-4号墳調査区配置図

の一部と考えられる。礫中の須恵器は坏の口縁部で(図12-5)、他に北側トレンチの中央から大型の甕の口縁部(図12-8)が出土している。周濠から復元すれば直径約15mである。

E-5号墳はE-4号墳から北西へ約30mの丘陵の端に立地している。墳丘は雜木におおわれていたが、伐採の過程で石室が残存していることが判明した。墳丘は東側が大きく削られており、この部分である程度の破壊を受けていると思われるが、天井石が動かされ土砂が流れ込んでいるものの、石室の下部は比較的良く残っていると推定できる。西から北にかけての部分は封土が動かされているので円墳としては現状はいびつなものとなっている。

トレンチは基準線に沿わせて方向の異なる2本を設定した。南側のトレンチでは古墳に近づくにつれ地山が下降していく。その下端部に2個人頭大の礫があった。東側のトレンチではなだらかなくぼみとピット1を検出している。ピットは、トレンチのセクションから判断して明らかに後世のもので、炭化物の混入が認められた。

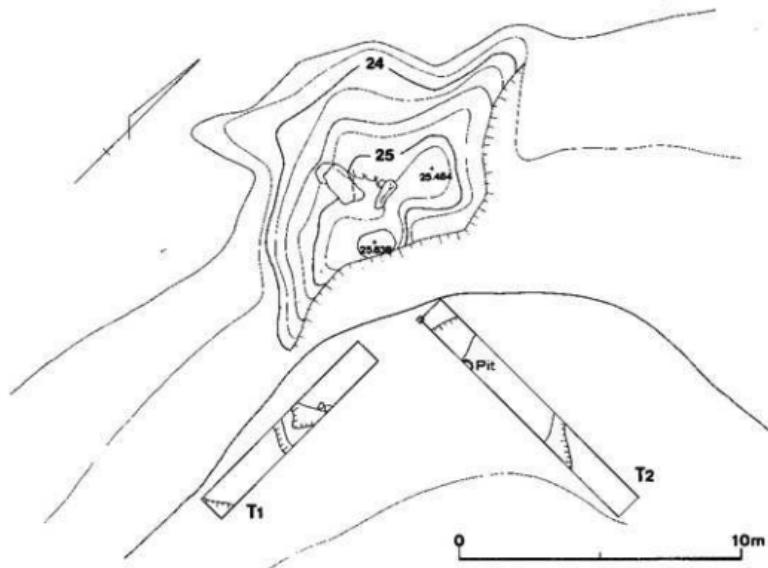


図10 E-5号墳調査区配置図

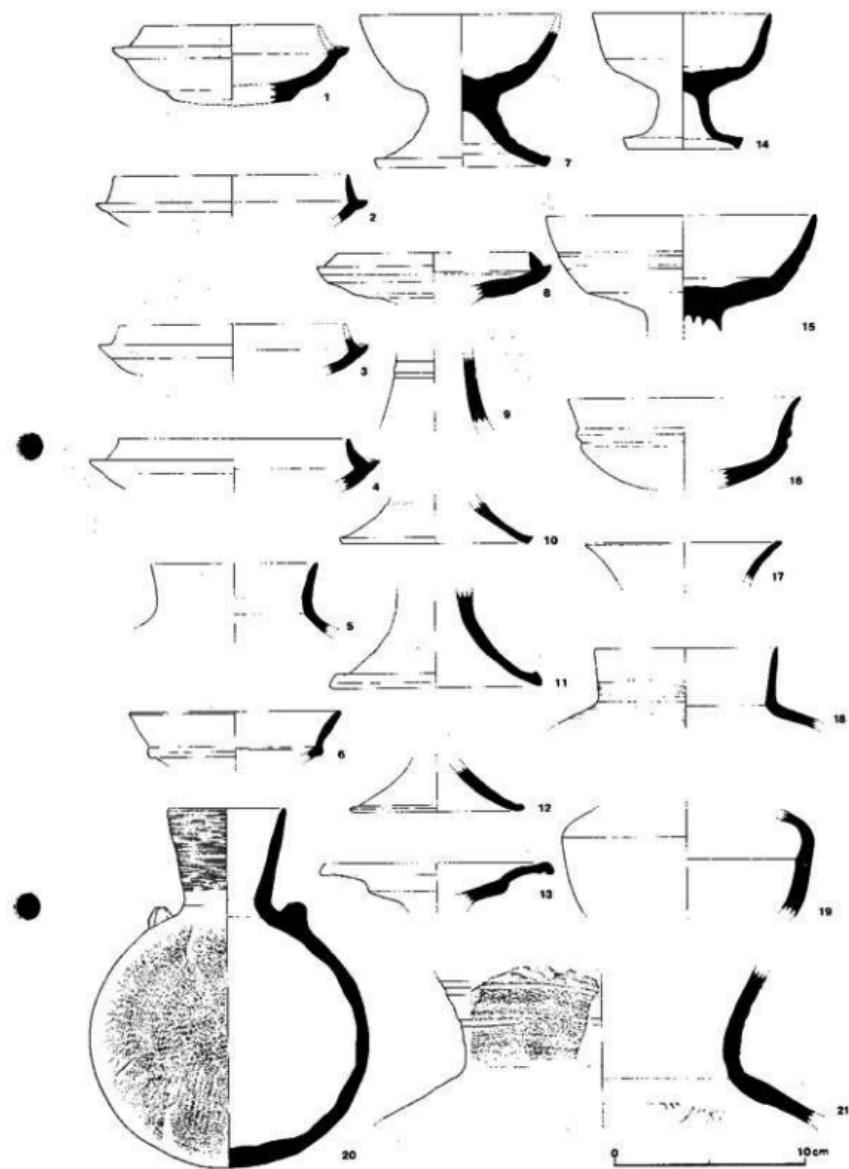


図11 須恵器実測図

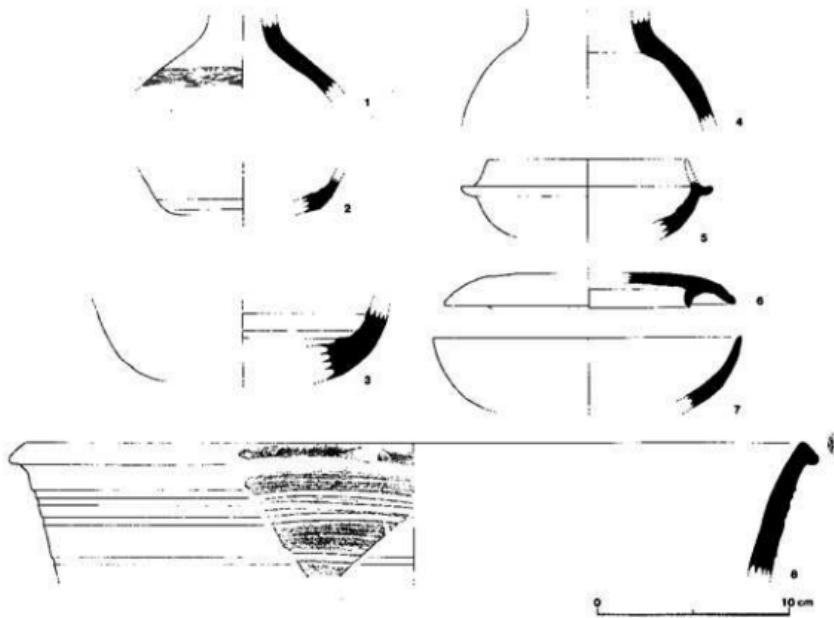


図12 須恵器実測図

土 器 觀 察 表

図11

番号	器種	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	D-2 T ₅	・たちあがりはくぐる。 ・体部は残り内側する。	环底部外面はヘラカスリ、他 は内外面ともヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒混入。
2	壺	D-2 T ₂	・たちあがりは内傾しながら長くのびる。 ・受部はほぼ水平にのび端部は丸い。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
3	壺	D-2 表探	・たちあがりは内傾してのびるが、横 部をくぐる。 ・受部は外上方にのび端部を丸くおさ める。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
4	壺	D-2 表探	・たちあがりは内傾する。 ・受部は外上方にのびる。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
5	直口壺	D-2 T ₂	・ほぼまっすぐにたちあがる口部。	内外面ヨコナデ。	色調は淡青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。内外 面に自然輪。
6	壺	D-2 T ₂	・やや外反気味にたちあがる口部。 ・外面に小突唇がめぐる。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
7	高壺	D-2 T ₂	・环部はゆるやかに内傾しながらたち あがり深い。 ・脚部は八の字状に開き、端部に平坦 面をもつ。	环底は内面ヨコナデ、外面カ キ。 脚部は内外面ともヨコナデ。	色調は淡青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
8	高壺	D-2 T ₂	・たちあがりは厚く、断面が圓い三角 形を呈す。 ・受部は短く、端部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。	色調は淡青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。

番号品種	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	備考
9 高 环	D-2 Ts	・長くのびる脚部。	外面に2本の凹線をめぐらす。 他は内外面ともヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
10 高 环	D-2 Tz	・八の字状に開く脚部。端部は内傾する平凹面を有する。	外面に凹線を施す。他は内外面ともヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
11 高 环	D-2 表採	・脚部は上方に押出しで外傾する平坦面をもつ。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。外面にゴマ状自然釉。
12 高 环	D-2 Tz	・八の字状に広がる脚部。端部は丸い。	内外面ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
13 曲	D-2 Tz	・やや内寄気味に開き、屈曲して外反しながらさらに大きく外方に開く。 端部は丸く下に垂れる。	内外面ヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。内外面に自然釉。
14 高 环	D-2 Ts	・环部は平坦な底面から側曲し、わずかに外反しながら立ちあがる。 脚部は下方に4ついた後、強く屈曲して開く。端部は下方に小さく突出し、内傾する平坦面をもつ。	环底部はナデ。他は内外面ともヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。环部と脚部外面に自然釉。
15 弧 环	D-2 Tz	・外面に横きを有し、外方にまっすぐのびる脚部。	外面に横き凹線を2本めぐらし、その下にこまかいカキメ。 环底部内面は調整不明。他はヨコナデ。	色調は暗青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
16 高 Jp	D-2 Tz	・环部はゆるやかにたちあがり、端部は外反する。	外面に凹線と小突起をもつ。他は内外面ともヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。
17 簪	D-2 Ts	・外反しながら上方にのびる口縁部。 端部に狭い平凹面をもつ。	内外面ヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
18 直 口縁	D-2 Ts	・ほぼまっすぐにのびる口縁部。	外面に浅いカキメを施し、11 緑縫部はヨコナデで削す。内面はヨコナデ。	色調は外面青灰色、内面淡 青灰色。焼成は堅固。胎土は 砂粒僅か。
19 簪	D-2 Ts	・肩部に美しい模を持つ。	外面はカキメで一部をヨコ ナデによって削す。 内面はヨコナデ。	色調は外面青灰色、内面淡 青灰色。焼成は堅固。胎土は 砂粒僅か。
20 楔 瓶	D-2 Ts	・口縁部には直上方にのじ、脚部は丸くおさめる。 ・器高 18.5 cm。	体部外面にはこまかいタキの 後同心円状のカキメ。 口縁部外面にもカキメをめぐらす。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。
21 瓶	D-2 表採	・ゆるやかに外反する肩部。	外面に浅い凹線を3本めぐら せた後、15条1単位の擦描波 状紋を施す。他は外面、口縁部 内面ともヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。肩部内面、 体部外面にゴマ状の自然釉。

図表12

番号品種	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	備考
1 瓶	D-1 Tz	・脚部から環部にかけての破片。	肩部にこまかいカキメ。他は 内外面ともヨコナデ。胎土二 枚を貼り合わせて形成。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。
2 环	D-1 Tz	・环底部の破片。	底面外側へラケズリで、他は ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
3 瓶	D-1 Tz	・密肉がきわめて厚い。	内面ヨコナデ。外面は調整不 明。	色調は内面淡青灰色、外 面深灰色。焼成は堅固。胎土 は砂粒若干。
4 瓶	E-2 Ts	・丸みのある脚部で、湖壁が比較的厚 い。	内外面ともヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。外面にゴ マ状自然釉。
5 Jp (後 中)	E-4 Tz	・受部は焼く丸くおさめる。 ・体部は深く内側する。	内外面ヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は軟弱。 胎土は砂粒若干。
6 环 蓋	E-2 Ts	・天井部は平底で、ゆるやかに下がる。 ・かえりは真下につき、外側にむかって やや斜めする。	天井部外側へラケズリ。他は ヨコナデ。	色調は青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。
7 环	E-5 表採	・内寄気味に立ち上がる脚部。	JF底部ナデ、他は内外面とも ヨコナデ。	色調は接青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒僅か。
8 瓶	E-4 Ts	・ゆるやかに外反する口縁部。端部の 半周面は広く、強く外方に張り出 す。 ・規定口径 40.0 cm。	外面に4本の凹線をめぐらし 端部の広い部分に不規則な擦 描文を施す所がある。他は 外面へラケズリ、内面から口縁 端部にかけてヨコナデ。	色調は暗青灰色。焼成は堅固。 胎土は砂粒若干。

V ま と め

これまで調査の概要を述べてきたが、結果的に調査のできた面積は約 600 m²と丘陵全体からすればわずかである。また、そこから得られた成果もきわめて部分的なものと言わざるを得ない。当然古墳群としての全体像を把握しながら個々の性格付けを行うべきであろうが、今回はそこまで検討するに至らなかったことを前もってお断りしておきたい。

調査の目的は当初、地表上にその痕跡が認められない丘陵部分に古墳の存在を確認することであった。すなわち A～C の 3 調査地区である。50 数基と言われる古墳の総数と、これまでに作成されている何枚かの分布図を手がかりにすればこれらの地区に古墳が存在した証拠が何らかの形で残っていると考えたからである。しかも A 地区の丘陵西端に前方後円墳が現存し、今では山陰本線によって切り通されている部分ないしその南にはかつて 6 基の古墳が築かれていた（現在では 1 基残る）ことになっており、これらを考え合わせれば当然存在してしかるべき地形であろう。しかし調査の結果、以上の 3 地区に新たに古墳を確認することはできなかった。調査面積が狭いのは否めない事実であるが、今のところ鶴ノ鼻丘陵の中央部分は古墳の存在が空白となっている。

一方、伐採の過程で C 地区の北側に半壇、全壇を含む 5 基の古墳を確認することができた。これらの古墳は丘陵の縁辺部に接するように次々と築かれており、このような立地の仕方は大半の古墳に見られ、鶴ノ鼻古墳群における基本的な築造パターンのひとつと考えられる。

また、D-2 号墳で石室の一部が検出されたのは大きな成果であったと言えよう。これまでにすっかり破壊されてしまったと言われてきた古墳にも、程度の差はあるものの石室の下部構造ないしその基底部が残っていることを裏付けた典型例である。そして、周濠の検出のみにとどまった D-1 号墳についても同様の事が充分予想されると考える。

なお下地区については伐採にとどまり、発掘調査には至っていない。

次に遺物について若干ふれておきたい。

遺物はすべて須恵器で、表採品を含めてコンテナー 1 箱と少ない。しかし、D-2 号墳の第 2 トレンチと石室を検出した第 5 トレンチからは比較的多くの資料を得ることができた。特に第 5 トレンチの石室床面から出土した須恵器には完形品を含み、原形をよく残すものが数個体あった。

器種には、壺、蓋、高壺、壺、甕、甕、提瓶などがある。

坏は口径12cm前後で、たちあがりが内傾し、受部が外上方に短く突出するもの（図11-1, 2, 3, 4）と内擣しながらたちあがり端部を丸くおさめるもの（図12-7）がある。また、E-4号墳の礫床中から出土したF（図12-5）は厚い受部がほぼ水平に突出して坏部も深いなど形態的には古い様相を呈するが、ひとつのバラエティーと考えられる。（文献16）一方で、本片子窯跡で数多くの出土をみた、高くふんばる高台に深い坏部をもつ坏類は今回は出土していない。これは益田周辺に特徴的な器種と考えられており、当古墳群ではこれまでに1点、他に北長迫横穴群に数例みられるようである。（文献17）

坏蓋は1点出土している。内側にかえりをものもの（図12-6）で、時期的には既述の坏類よりは下降する。固化できなかったが、他にE-5号墳周辺の表探遺物の中に明らかにつまみを付した痕跡をとどめる蓋の破片があった。

高坏には小型と大型の二種類がある。低脚高坏には、ゆるやかにたちあがり深い下部を有するもの（図11-7）と脚部が強く屈曲して開くもの（図11-14）がある。後者は本片子窯跡で高坏A類と分類されているものにあたる。大型の高坏（図11-15、16）は坏部のみの出土だが長脚がつくと考えられ、脚部（図11-9）は色調や手法から15と同一個体であろう。他に有蓋高坏が1点ある（図11-8）。

提瓶（図11-20）は今回の調査で出土した遺物の中で唯一の完形品であり、D-2号墳の石室床面から出土している。口縁部は上方に長くのび端部は丸い。この口縁端部の手法（文献5）は、平坦面を有する益田市西平原町芝窯跡出土のものとは異なり、後出的な技法のひとつと考えられる。

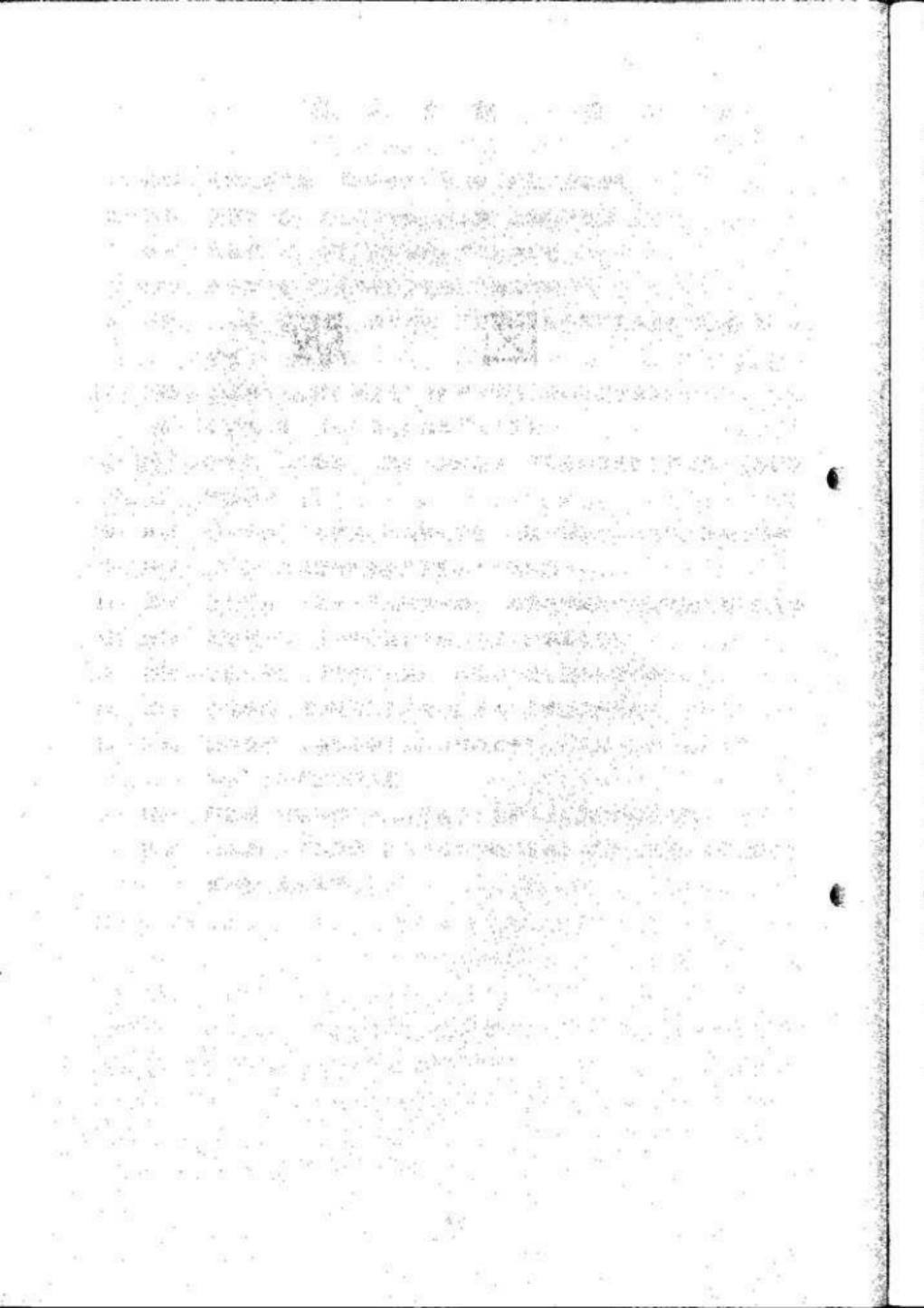
さて、石見地方西部における具体的な須恵器編年は未だなされていないのが実情だが、（文献16）近年益田市本片子窯跡の調査が行なわれ、浜田市日脚遺跡でも良好な資料が蓄積されつつ（文献15）あるようで、さらに田中義昭氏も西平原窯址群について再評価を行なうなど近い将来にこの地域で編年が試みられる気運が高まりつつある。調査で得られた須恵器の中には芝窯跡と本片子遺跡のそれぞれに重複する器種が何個か存在しているが、詳細な検討は今後の研究に委ね、今回は資料提示にとどめることにした。

ところで鶴ノ鼻古墳群は石見地方を代表する後期群集墳のひとつに数えられてきているが、地形測量をはじめとする資料化が充分に行なわれているとは言い難く、今回の調査を契機に将来にわたって当古墳群の再検討が必要な時期にさしかかりつつある。その意味で一部を除いて、今回確認された古墳を過去に作成された分布図のものと符合させることをえてしなかったことを付記しておく。

参考文献一覧

- 1 1924 野津左馬之助 『島根縣史』第三卷 島根縣史編纂掛
- 2 1941 矢富熊一郎 『安田村發展史』上巻 安田村図書館
- 3 1950 矢富熊一郎 『鶴ノ鼻古墳群』安田村公民館
- 4 1952 矢富熊一郎 『益田市史』上巻 益田公民館
- 5 1958 大川清 田中義昭 西脇丹三 『島根県益田市西平原窯址』『古代』29・30合併号
- 6 1960 山本清 『山陰の須恵器』『島根大学開学10周年記念論集』
- 7 1963 矢富熊一郎 『益田市史』益田郷土矢富会
- 8 1963 山本清 池田満雄 近藤正 東森市良 『島根の文化財』第三集 島根県教育委員会
- 9 1966 池田満雄 『古墳文化の地域的特色－山陰－』『日本の考古学』IV 河出書房
- 10 1968 山本清 『新修島根県史』通史編1 島根県
- 11 1974 前島己其 『益田・北長迫横穴群』『島根県埋蔵文化財調査報告書』第V集
- 12 1975 矢富熊一郎 『益田市誌』上巻 益田市誌編纂委員会
- 13 1978 横山純夫他 『古代の石見』 八雲立つ風土記の丘資料館
- 14 1980 山本清他 『山陰古代史の周辺』下巻 山陰中央新報社
- 15 1982 田中義昭 『益田市西平原窯址群の意義について』『ふいーると・のーと』No.3 本庄考古学研究室
- 16 1982 勝部昭 房宗寿雄 『本片子遺跡・木原古墳』益田市教育委員会
- 17 1983 田中義昭 『石西地方における横穴墓の形態と時期』『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学

図 版

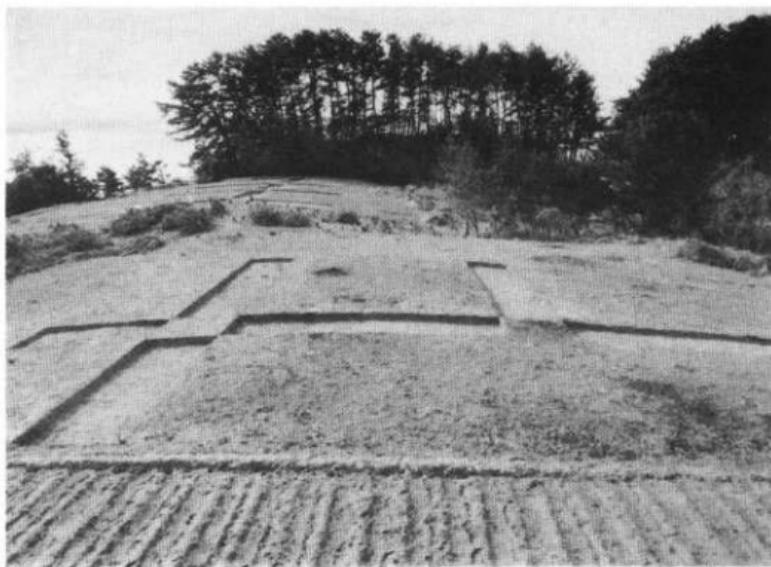




遠 景（北東から望む）



近 景（南から望む）



A・B 地区全景



発堀作業風景



C 地区全景



C 地区古墳群全景



D 地区近景（南から望む）



D-1号墳周濠検出状況



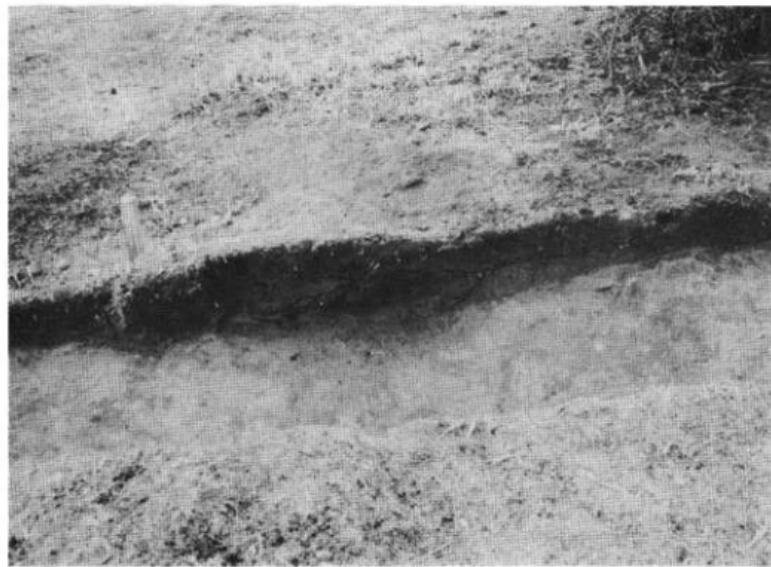
D—2号墳石室検出状況



石室内遺物出土状況



E—1·2·3号墳全景



E—1号墳周濠検出状況



E-3号墳全景



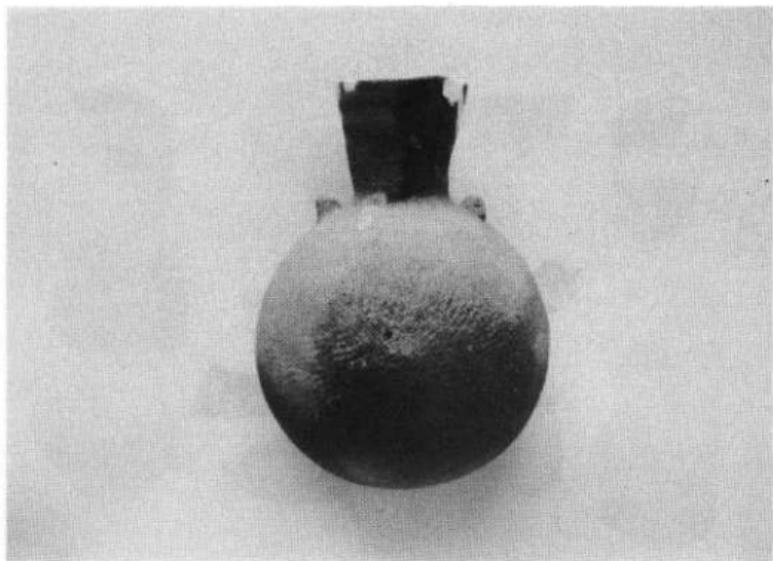
周濠検出状況



E-5号墳全景



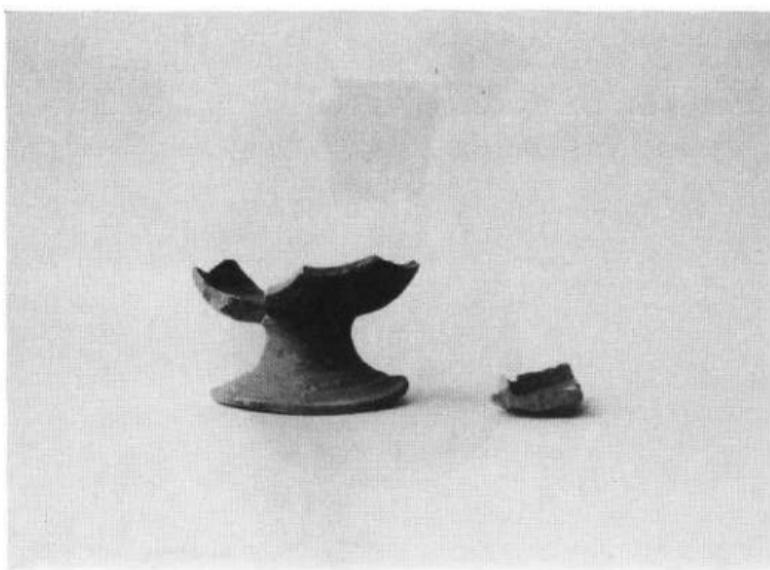
石室残存状況



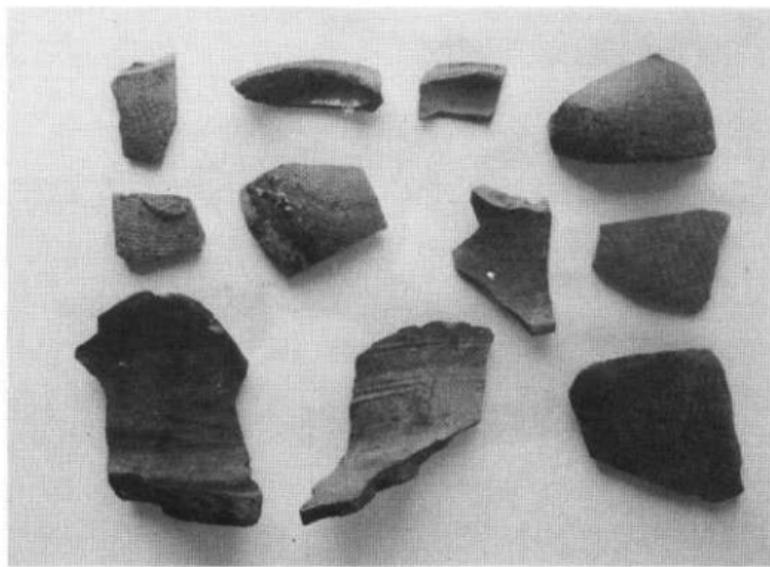
提瓶 D-2号墳 T₅出土



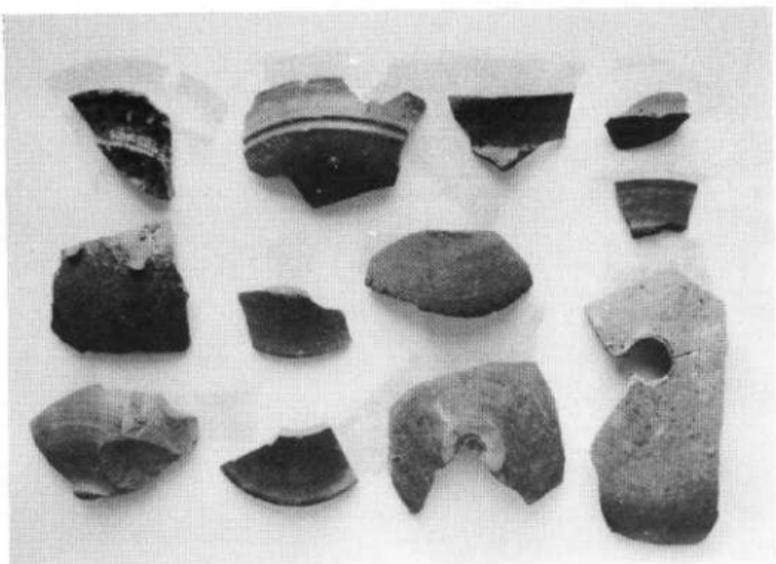
高杯 D-2号墳 T₅出土



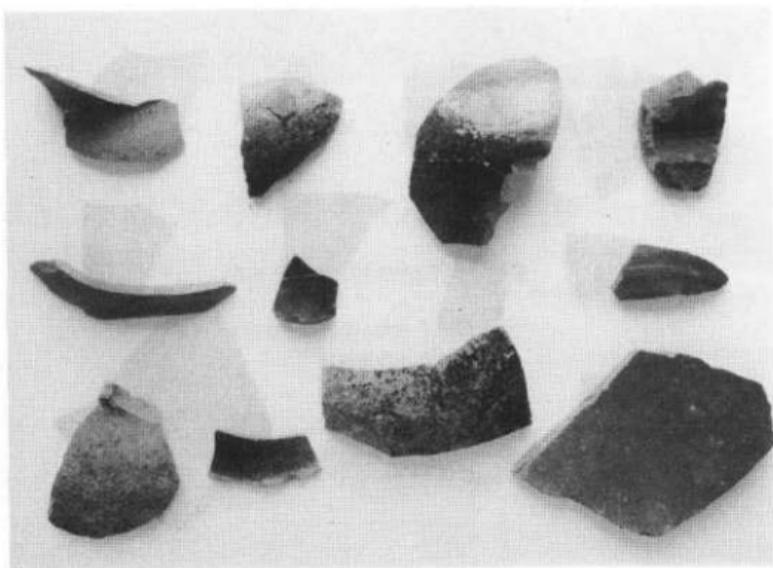
高坏 D-2号墳 T₂出土



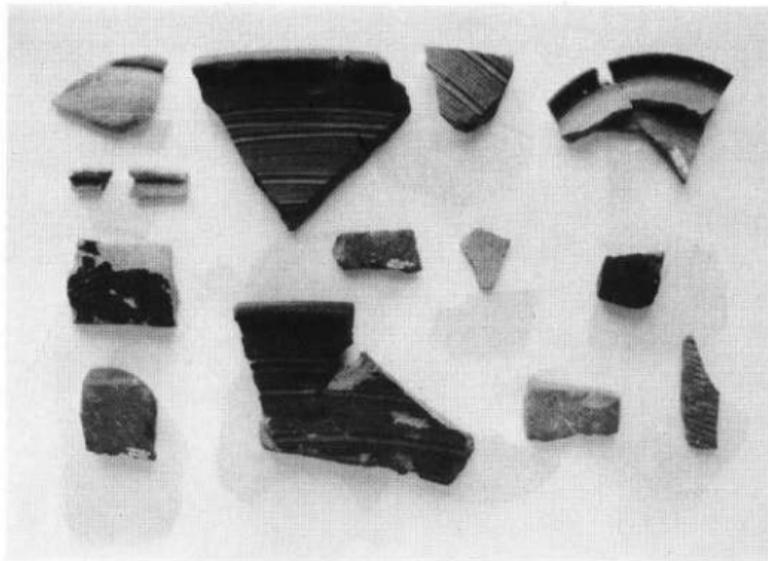
須恵器片 D-2号墳表採



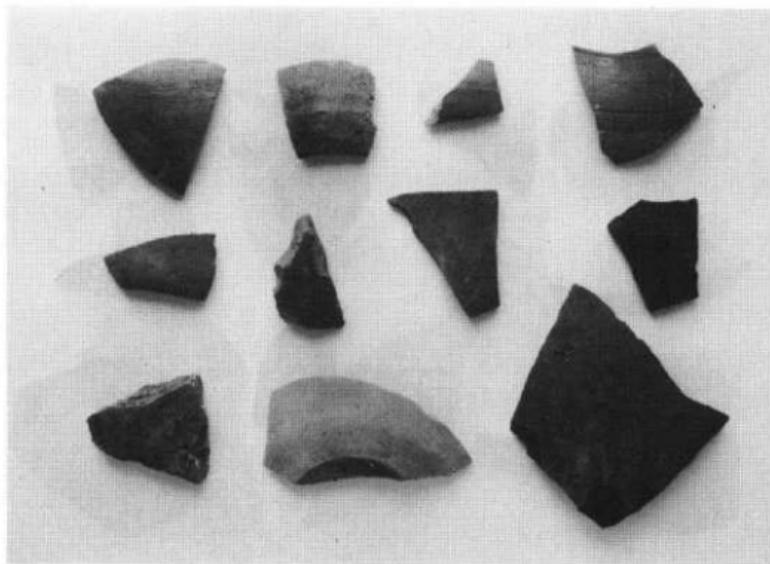
須恵器片 D-2号墳 T₂出土



須恵器片 D-2号墳 T₅出土



須恵器片 E1~4号墳出土



須恵器片 5号墳表採・出土

昭和59年 3月31日

鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報

編集・発行 益田市教育委員会
島根県益田市常盤町1-1
印 刷 柏村印刷株式会社
島根県浜田市相生町